

餌付けを考える

藤巻裕蔵

帯広畜産大学野生動物管理学研究室, 080-8555 帯広市稲田町西2-11

日本白鳥の会の研修会が福島市で開催され、2日目には阿武隈川の白鳥渡来地を訪れた。私にとっては、初めての阿武隈川訪問である。福島市内で文知摺橋上流の左岸が、水鳥の最も多く集まっている場所である。私が着いたときにはすでに河川敷には多くのオナガガモが餌を求めて歩きまわっていた。人が近づいても逃げることなく、餌をもっている人について歩く始末である。川の中にもかなりの数のカモがいた。そのほとんどはオナガガモである。川には100羽を越すコハクチョウがいたが、あまりのカモの多さに、コハクチョウがなんとなく少なく感じられたほどである。

同じようなオナガガモの大群は、餌付けをしている所ではよく見られる。盛岡市の高松の池や伊丹市の昆陽池などがそうである。しかし、この大群を見ていて、これが野生の動物なのかといささか不安になった。普段観察している鳥たちからは想像もできない光景で、異常な状態ともいえるのではないかと思った。

一般に餌付けは「よいこと」と考えられ、広く行われている。しかし、餌付けについては、鳥にとっても、われわれ人間にとっても、問題が少なくないと考えている。いままで、餌付けの是非については、白鳥の会の中で議論されたことがなかったと思う。ここでは、餌付けについていくつか問題提起し、皆さんとともに考えていきたいと思っている。

「餌付け」と「給餌」

餌を与えることに対して、「餌付け」と「給餌」と二つの用語がある。この二つは、あまりはっきり区別されていないことの方が多い。しかし、「厳格に定義すれば、「餌付け」とは、ある動物を対象にそれが本来の食性であると否とにかかわらず、人間が意図的に何らかの餌を与え、その餌に慣れさせ、その動物の持つ本来の行動のパターンを変えるものを指す。それに対し「給餌」とは、単に動物が生きていく上に必要な食物を補給することで、対象動物の行動を規制するといった意図はまったく含まない行為と解釈される」というように区別する考え方もある(日本自然保護協会 1978)。この二つの用語は、前述のようにはっきり区別されずに使われていることが多いこと、

またほとんどの場合にはっきりした食物不足を確認した上で食物を与えているわけではないため、ここではこの二つの用語を区別せず、普通野鳥に餌を与える行為を全て「餌付け」として、この用語を用いることにする。

餌付けの目的

餌付けには、さまざまな目的がある。1) 餌不足を補う、2) 野生動物とのふれあい、3) 観光客誘致、4) 被害防止、5) 学術研究などが主なものであろう(日本自然保護協会 1978)。四番目はあまり例がなく、五番目は限られたごく一部の人が行うことなので、最初の三つの場合について考えてみたい。

一番目の「餌不足を補う」場合の給餌は、対象とする動物という相手のことを考えた上での行為である。餌を与えるにしても、不足分を補うだけで、それ以上与える必要はない。ただ、餌不足に陥っているかどうか、不足を補うのにどの位の量を与えればよいのかの判断は、非常に難しい。このような判断を下すためには、ハクチョウの生息数や1日の摂食量、自然条件で餌となるものの現存量を絶えずモニタリングすることがまず必要である。しかし、現在このようなモニタリング体制をとることは人材面からも財政面からも不可能に近い。とりあえずは、ハクチョウを絶えず観察し、餓死と思われるような死亡が起り始めたら餌不足と判断する以外にないのではないかと思う。その一例として、北海道厚岸町の厚岸湖の場合を紹介しよう。これは厚岸水鳥観察館の澁谷辰生さんからの報告である。

「2001年2月の寒さは尋常ではなく、厚岸湖はほぼ全面結氷、厚岸湾には流水が入り込み、カキ・アサリの養殖業活動もほぼ停止状態に近づきつつあります。このような環境の中、残った水面にオオハクチョウが1,000羽ほど残っていますが、一部町民の中に、ハクチョウが可哀相だから給餌をするよう要請があります。実際は、残った水面で十分に餌はとれており、その水面が小さくなるに従いオオハクチョウたちも厚岸湖から飛び立つ、という状態で深刻な状況ではないのです。基本的に厚岸町としては野生動物の動きに大きく関与するつもりはなく、私たち関係部署による普及啓発活動により、町の方針、オオハクチョウの詳細な動向、給餌しなくてもハクチョウがやってこられる今の自然環境をトータルに保全していくことを説明し



図1. 福島市阿武隈川河川敷における餌付けに集まるオナガガモ。

ています。しかし、連日夕方には-15度以下になり、早朝には-20度を下回る相変わらずの寒波で、日に日に今期の最低気温を更新している現在、採食可能な最後の大規模な開水面もついに消滅しています。この時点で、釧路市博物館の橋本正雄さんから、1. 住民との問題が発生してからすでに半月ほど経っているこの段階で、まだ1,000羽ものオオハクチョウがこの少ない水面に残っているのはすでに異常な状態である。ここ10年以上越冬地として適地だった厚岸湖が、20年ぶりとも言われる異常寒波により急激に氷結したことで、オオハクチョウが取り残された可能性が大きい。2. この状態が続くと、大量死が現実のものになる可能性があり、住民の感情を考えると、緊急給餌を行うこともやむを得ないのではなかろうか、との助言をいただき、役場内で協議した結果、緊急措置としての給餌を行うことを決定しました。この厚岸町の例は、給餌をすぐ決めるのではなく、状況を把握し検討した上での判断で、餌を与えるまでの過程として今後の一つの前例になると思う。

餌不足を補う別の方法として、採餌できる時間をのばすことがある。20年前くらいに、白鳥の会で1月にイギリスのスリムブリッジの水禽協会に行ったことがある。冬のイギリスの日長時間は非常に短い。朝明るくなるのが8時ころ、そして午後3時近くにはもう暗くなる。暗くなると、水禽協会の池では照明をつけ水鳥が採餌できるようにしていた。ただし、このような対策は冬でも日長時間の長い日本では必要ないだろう。

二、三番目の「野生動物とのふれあい」や「観光客誘致」のための給餌は、餌不足になっていなくても人間側の都合で行うことである。そのため、餌をもって来る人が多くなるほど必要以上に餌を与えることになる。また特定の場所で餌付けすることにより多くのハクチョウやカモ類をその一か所に集めることになる。餌付けにより野生動物の行動を変えてしまう責任は大きい。

集中の弊害

餌付けの二つ目の問題は、多くの水鳥類の過度の集中である。

2000年の冬に韓国西海岸で10,000羽をこすトモエガモが死亡する事件があった。原因は鳥コレラとのことである。一か所に多くの水鳥類が集中するような場合、一度鳥コレラのような伝染病が発生すると、これらの動物への被害は甚大である。もともと、トモエガモは越冬期に大群となる傾向があるが、餌付けなど人為的なことで一か所に集中されるようなことは極力避けるべきであろう。

北海道のタンチョウは一時期20数羽にまでなったが、餌付けにより冬の死亡率が減少して個体数が増え、現在は800羽前後まで回復した。環境省のタンチョウ保護増殖事業の中でも、今後越冬地を分散させようという試みが行われている。その理由は、集中している場所で伝染病が発生した場合には、タンチョウという種に大きな被害がでるからである。

以上のようなことを考慮すると、今後餌を与えるにあたってはハクチョウやカモ類が一か所にあまりにも集中しないように心がけるべきだと思う。また、決まった所で餌を与える場合には、時間帯を決めてそれ以外はできるだけ他の場所で採餌で

きるようにする配慮が必要だと思う。

人馴れ

三番目は、人馴れである。

最近は何れにより、ハクチョウが人馴れし、人をまったく警戒しなくなっている。40～50年ほど前、ハクチョウの写真を撮影しようと近づくだけでも非常に苦労した頃には考えられなかったことである。このこと自体は悪いことではないが、ハクチョウが与えられた餌に依存しすぎた結果、マイナスになったとおもわれる例もある。これも渋谷辰生さんが厚岸町で観察したことであるが、「最後まで人間に餌をねだっていた首輪付きオオハクチョウが、水面が凍った後もその場所を離れようとせぬに衰弱死した」というものである。また、厚岸湖では人馴れしたオオハクチョウが、あまりにも人間の生活領域に近づきすぎ、イヌに襲われたり、交通事故にあうことになっている。これらのことも、餌付けが野生動物の行動パターンを変えてしまった例であろう。

十勝地方では、春先にオオハクチョウが雪の融けたムギ畑に飛来し、秋蒔きのムギの葉を食べるといふ被害が出ている。これも、人馴れした個体が車や人が頻繁に通うような農耕地でも採餌する結果であろう。

このような人馴れを避けるため、厚岸町では餌付け自粛の方針を打ち出し、図2のようなチラシを町内に配付している。

餌の質

餌付けの四番目の問題は、餌の質である。私は与えるのはできるだけ自然の食物かまたはそれに近いものがよいと考えている。飛来地で与えられる餌を見ていると、穀類のほか、多いのはパン、それに量はそれほど多くないがスナック菓子である。これらの加工食品の塩分は多かれ少なかれ野生の鳥が食べている自然の食物に比べると高いと思われる。私たち人間でも、塩分の摂りすぎが健康によくはないことはよく知られている。このことから連想すると、加工食品は野生の鳥にはよくないと思うのだが、実際はどうなのかははっきりしていない。そのため、野生の鳥が人間が食べる加工食品を大量に摂っても健康上で問題がないことがはっきりするまで、パンやスナック菓子を餌として与えるのは控えた方がよいと思っている。

本来は、餌を与えなくても多くのハクチョウが越冬できるように、自然の餌条件をととのえる方が重要ではないかと思う。例えば、宮城県大河原町では、渡来地となっている川近くの水田にマコモを植付け、食物条件の改善をはかっている(平野1978)。餌付けしている所でも、ハクチョウは与える餌だけに依存しているわけではなく、自然の食物も食べていると考えられるので、このような点も考慮する必要があるだろう。また、どうしても餌を与える必要があるのであれば、穀類など自然物に近い餌を与えた方が無難だと思う。

以前、宮城県の伊豆沼を見学したことがあるが、ここでは与える餌として青米が用意されており、餌を与えたい人はこれを使い、勝手に加工食品を与えないような

野生生物への餌付け自粛に関するお願い

厚岸町では、これまで毎年やって来るオオハクチョウなどへの餌付けを行わないようお願いしております。これは、以下の理由によるものです。

ハクチョウやカモをはじめ野生生物が人馴れすることにより

1. 交通事故や犬猫による事故、また、カラス等に襲われる原因になってしまいます。
2. 自分で餌を探す努力をしなくなる可能性があります。

今年のように、いつも餌付けを行っている場所が凍り付いてしまうと、最後まで人間にエサをねだっていたものほど衰弱し、そのまま死亡してしまうものもいます。

むやみに餌付けすることは、その生き物の生態を乱すだけでなく、“餌付けられやすい種類だけ可愛がる”という“生き物に対する差別”を生みます。つまり、安易な餌付けは自然保護でも何でもなく、生き物を見たら餌をあげるという短絡的な考え方を助長しているに過ぎません。

<厚岸湖内のオオハクチョウの状況と今年の緊急給餌について>

長らく越冬適地と思っていたオオハクチョウも、近年希にみる厳しい寒波のため、その動き鈍ってしまったようです。

餌を食べる水面が少なくなるに従い、約1,000羽ほど残っているオオハクチョウにエサ不足の兆候が見え始めてきました。そこで今年度は特例として、厳冬期の一定期間、町民一部の方々のご協力を得て、エン麦の給餌を行うことにいたしました。人慣れしていないグループへの効果的な給餌と、それらの市街地への接近を防ぐため、なるべく遠くの氷上にて給餌を行っております。また、水質悪化を避けるため、水中に分散することの無いようにいたしておりますので、関係者の皆様のご理解をお願いいたします。

それでも、やはり死亡するものも多数でできません。野生生物の「死」は、それ自身が、他の生き物への食べ物となり「生」につながるもので、生命の営みの断片でしかありません。厚岸は、非常に豊かな自然の営みを目にする事ができる非常に貴重な地域であります。この自然の生き物の営みを優しく見守っていただくようお願いすると同時に、これら素晴らしい環境を保全していくことが、真に野生生物と付き合うこと、私たちの生活基盤を守ることである点を理解していただき、また理解していただけるよう私たちも努力していきたいと思っております。



<広辞苑より>

餌付け：人に馴れにくい野生の動物を、人から餌をもらうまでに馴れさせること。

給 餌：餌を与えること。

厚岸町役場環境政策課

仕組みになっていた。これも、加工食品が野鳥には必ずしもよくないという考えに基づいていることと思う。

餌付けの功罪

日本自然保護協会(1978)は、1970年代前半に行った全国アンケート調査のまとめの中で、餌付けの功罪について、「ほどんどが功ありとしている。これはそれまで餓死していたものがいなくなったということからである。さらに大きな功は、情操教育、自然観察指導などの役割を果たしていることである。罪のほうでは、野生の感じが失われること、そして給餌によって完全に家禽化するのではないかという心配もあった。」と述べている。

餌付けの「功」の面として、死亡を減らすことがある。しかし、大量死が起こるのでなければ問題にすることはないとおもう。死にかかっている動物をそのままにすることには、反発もあるとおもうが、野生動物では普通でも死亡率が非常に高く、「死」も野生動物の一つの生活断面であることを理解するべきであろう。衰弱による死亡は自然条件ではごく自然に起きていることである。前に紹介した厚岸町のチラシ(図2)はこのような点をきちんととらえており、餌付けに対する基本方針は正しいと思う。むしろ、普通の自然条件では死亡するような個体が、過度の食物の存在により生きのびることの方が、その種の将来にとってはマイナスになるのではないかと思う。

死亡を減らすということは、結果として数を増やすことになる。では、増えることは全てがよいことなのだろうか。国外では個体数の増えすぎによる問題も起きているようである。ロシア極東の北部は、多くのガンカモ類の繁殖地となっているが、インジギルカ川沿いなど一部の地域では、オオハクチョウが多くなり、同じ地域で繁殖するマガンを圧迫し始めているという。これは、この地域で調査を行った日本野鳥の会の金井裕さんの話であるが、なんでも増えればよいということではなく、生物の種相互のバランスが必要だと思う。

また、カモメ類では餌付けによる弊害も出ている。北海道新聞(2001.4.12)に「海鳥にえさやめて」という記事が出ていた。これによると、羽幌町観光協会は、天売島を訪れる環境客に対し、海鳥にスナック菓子などを与えるのを自粛してもらうことを決めたということである。海鳥が人に馴れ、オオセグロカモメなどが売店に侵入し、スナック菓子をさらっていく被害が出るなどのほか、人間と海鳥の過度の接近が生態系に影響を与えることも懸念されているという。

野生動物とのふれいは、私たちの生活の中では大切なことである。しかし、野生動物は飼育している愛玩動物ではない、という点をわきまえなければならぬだろう。

餌付けの問題点

日本自然保護協会(1978)によると、餌付けの問題点としては次の4点があげられている。

1. 野生の喪失：餌づけによって野生鳥獣は野生特有の性質を失い、人間の与え

る食物に依存する飼育動物化するおそれがある。

2. 農作物への加害：餌付けによって農作物の味を覚えたことが農作物への食害に走らせる動機を作る場合がある。この結果畑荒らしのレッテルが張られ、駆除の対象とされるに至った。

3. 個体数の増加：冬季餌不足の折に与える食物が死亡率を低下させ、個体数の増加の一因となった。しかし、その結果環境が持つ収容能力を上回り生息環境の破壊を招き、畑地への進出を余儀なくした。この観点からも個体数増は必ずしも保護とは言えない。増加分の生息地を確保して初めて意味をもつものである。

4. 真の保護を見失わせる：給餌は時として、もはや生息し得なくなった鳥獣をも定着させることができるが、これによりその環境が今なお豊かであるような錯覚を与え、本来あるべき保護策を見失わせる。

このように、餌付けには多くの問題点がある。

今後の問題

私は、野生動物保護管理の基本は生息場所の保全にあると考えている(藤巻 1999)。日本自然保護協会(1978)も、野生動物に対する給餌の中止のための「根本的は解決策」としては、「その動物が自然のまま生活できる環境を整備することが必要である」と述べている。

野生動物の保護管理対策の中で、餌付けはその一つではあるが、餌付けを保護対策の中心にすえると、上述のようにこれだけが保護の方法だと勘違いすることになる可能性が強い。やはり、私は基本的には十分に食物をとれるような生息環境を確保することを第一とし、餌付けは補足的なものだとおもう。

この問題については今後とも皆さんと考え、議論していなければならぬと思うので、会員の皆さんからのご意見をいただけたらとおもう。

最後に、厚岸湖に関する情報をお送りいただいた厚岸町水鳥観察館の渋谷辰生氏にお礼申し上げます。

文献

藤巻裕蔵, 野生鳥獣の保護管理. 森林保護 (270) : 9-11.

平野隆, 2000. 大河原町のマコモ植栽作戦. 日本の白鳥 (23・24) : 10-15.

日本自然保護協会, 1978. 野生鳥獣の餌づけを考える. 一餌づけから環境保護へ一.

日本自然保護協会, 東京.